

令和紙



おりおりの記

「海」と「人」を基軸に据えて 「未来を拓く」

元金融庁長官
前駐コロンビア大使

畑中龍太郎

日本の国土面積は言わずと知れた38万km²（世界61位）。中国の2割に過ぎない。しかし、排他的経済水域（EEZ）は447万km²（中国はこの2割）で、これに深さを加味した「体積」では世界4位。お隣の南洋諸島のパラオ、ミクロネシア連邦、マーシャル諸島（旧日本領）に、キリバス、ソロモン諸島を加えた5ヵ国に視界を拡げれば、その人口は100万人、EEZの合計は1,000万km²で、ロシアの全陸地面積に匹敵する。

地球の半分を占める太平洋、特にその西太平洋には東から西への太平洋プレートの移動により、東より多くの資源があるという。この海域に眠る無尽蔵とも言われるエネルギー、鉱物資源に対し、探査・掘削・加工・環境保全の一貫した技術で、日本は世界の最先端に行く。また、この広大な西太平洋における温暖化などの環境対策は、即、地球全体の環境保護に直結する。前大戦で多大の迷惑をかけたキリバスなどの環境対策を支援する責務もあろう。米国等と連携したこの西太平洋の資源管理と開発は、世界のエネルギー事情を一変させるであろうし、広域の環境保全は人類への多大の貢献となろう。関連技術を周辺国に供与すれば、我が国への期待や評価も大いに高まる。

加えて、2030年頃には、北極海の氷が溶け通年航行が可能になるという。そうなれば、スエズ運河経由のアジア・欧州間や、パナマ運河経由で行く米東海岸は、距離が3～5割大幅に短縮される。船の燃費は速度の3乗に比例するので、燃料費は大幅減となる。そして、この海域には、石油・天然ガスのほか未発見資源の1/3～1/4が眠ると言われる。通年航行が可能となれば、アジアと欧州、米州間のヒト・モノ・エネルギーの流れが

劇的に変わる。我が国北東部は、その海上大動脈のアジアへのゲートウェイに位置する。神（仏）が与えたと思えない、この稀有な地政学上の優位さに思いを致す

ならば、海に目を向け、海を基軸にして、国の将来を考えて行くべきことは論をまたない（「海に生きる」）。数千年に亘り、我が民族が独立を保って来た所以でもある。

その際、欠くべからざる条件は、このシップの舵を握る「人材」を如何に育て創り上げて行くかという「人づくり」にある。即ち、一人ひとりが自分の頭で考え抜く日常、其々の道で懸命に頑張っている者を褒め讃え合う社会、多くの若者がどンドン海外に出て行き異なる文化に身を置き自己研鑽を積む教育システム（「開かれた国」）、世界の秩序やルールを決めるボードに日本の代表を必ず一人出せるようにするダイナミズム、そして、『「次世代」の利益を考えて行動する社会を構築する』という「窮極の利他」のために身を尽くす心持ちが欠かせない。

このように、「海」と「人」を基軸に据え、世界に貢献し得る新たなアイデンティティを発見し創造する（「未来を拓く」）ことを通じて、小さくとも、世界から畏敬され敬慕される国（民）を目指さなければならない。

